

とりかへばや物語の構造

石 埜 敬 子

人情の微を穿てることなく、同情の禁じ難きところなく、彼此人物の性格十分に發揮せず、ただ叙事を怪奇にして前後応接に暇あらしめずつとめて読者の心を欺騙し眩惑して小説の功成れりとす。その奇変を好むや殆ど乱に近づき醜穢読むに堪へざるところ少からず

明治三十八年、国文学全史平安朝篇の中で藤岡作太郎氏がとりかへばや物語に対して書かれた論評である。以後、このとりかへばや物語に関しては頹廢、怪奇、変態の文学として「露骨な官能的獵奇的傾向」「反現實的、不自然、誇張に満たされた文学」といった評価が専らであった。確かに、古とりかへばやの改作とは言え、貴族社会が衰退してゆく途上に誕生したこの作品は、源氏物語などの香り高い文芸性とは比べ得べくもない。しかし、平安後期の物語の一つとして見た時に、単に酷評に終っていた従来の読み方には不満を感じる。特に無名草子がこの作品に対して比較的高い評価を与えていることは無視できないだろう。作品そのものが研究者の手によって非常に読みやすくなってきた今日、従来の近代的倫理観文学観に基づく批評のそれはそれとして、文学の流れの中で作品の意味を捉え問い直すことが、後期物語の動向を知る上でも必要なのではないかと考える。そうした姿勢からの作品に即した細かな研

究はこれから課題であろう。ここでは物語の構造に対する今までの考え方について再検討することによって、この作品の特質の一面を探ってみたい。

1

現存とりかへばや物語の写本は全て近世以後のものであるが、少くとも八十本は下らないと紹介されている。写本は大きく四冊本系、三冊本系に分けることができる。今四冊本系各巻の冒頭と末尾を示すと

巻一 一つの頃にか、権大納言にて大将かけたまへる人、……

さはれ、かくと世をかりそめに思ひなすには、うきもうからずとなむ。

二 吉野の山の峯の雪おぼつかなからぬほどに……

同じ心なりけるもすがしがたくて立ち寄りたまひぬとぞ。

三 四月にもなりぬれば……

いとどしき嘆きぞまさることわりを思ふにつきぬ宇治の川舟

四 内侍のかんの君、十一月つごもりにまありたまへり。……

うくもつらくも恋しくも、ひとかたならずかなしとや。

となる。三冊本系は、この巻一と二を行変えせずに続けて一冊としたも

のである。各巻頭の書き出しや巻末の結び方からみて、四巻仕立てがもとの形であったと考えてよいだろう。それが遅くも近世初頭までの間に一部で巻一と二が合わされ、そのままの形で抵抗なく伝えられてきたと思われる。

ところで、この物語の構成に対する従来の大方の見解は、四冊本で言えば巻一―三と巻四を区別する二部構成の考え方であった。鈴木弘道氏はこれを正篇統篇と名付け、正篇を更に①変成の身に対する苦悶の時代、②四の君の密通・懐妊事件による大将(当時中納言・女)の悲歎時代、③大将(女)自身の密通・懐妊事件による悲歎時代、④大将(女)の宇治・吉野に於ける隠棲時代の四期に分けてこの四期を不遇時代とし、統篇の幸運時代と対比させて、「正篇では大将(女)が主人公となっているのに反し、統篇では尚侍(男)即ち今大将が主人公であるのはこの物語の構想に於ける特色であり恰も源氏物語第一部・第二部に於ける光源氏と第三部宇治十帖の薫を想起せしめるものがあるが、この物語では源氏物語のごとく決して何れか一方の人物のみが描かれるといふことはなく、常に主人公のよき相手として大将(女)尚侍(男)が活躍しつつ筋が展開されるのである」(「平安時代物語の研究」所収「とりかへばや物語の構想」と述べられた。これに対し桑原博史氏は、松尾聰氏の「宮の宰相中将は結局物語を終るまでその出奔した女中納言の行方を知らずにゐるのであるが、そのために引き起される種々の間違い、宮の宰相の懊悩混乱の様子が物語後半の主要なテーマであり、読者の興味の中心であるといっても過言ではあるまい」(「平安時代物語の研究」所収「とりかへばや物語」という見解

を引いて、「巻一から三までは男として行動する女君が主人公で、最後の巻四のみが女君と契った男、すなわち宰相中将が中心に描かれており、この物語は全体として女でありながら男として行動する主人公(並びにそれにかちむ宰相中将)に対し、男でありながら女として生活する弟は影の役割しかはたしていない」(「言語と文芸」昭和四十三年九月「とりかへばや物語の主人公」とされるのである。この桑原氏の論は、最後の一卷の主人公を男君ではなく宰相中将とみる点において鈴木氏と対立するが、物語の構造を二部に考える点では従来の説と変わらないものであった。

2

とりかへばや物語の得ている批評の最大原因は、女が男として生き、男が女として生活するという性の倒錯にある。現代の我々の意識からこの構想を考える場合、まことにグロテスクに思われる筋立てであるが、当時の物語享受者にさほど怪奇・変態という受けとられ方をされていなかったらしいことは、ことごとしさをひどく嫌った無名草子がその点を批難していないことから察することができる。男女を問わず物語の主人公は女性的な美を持っていることが要請されていたのであり、例えば須磨の浦に落胆の日を送る光源氏を「うち眺め給て涙のこぼるるをかき払ひ給へる御手つき、くろき御数珠に映え給へるは、故里の女恋しき人々の心皆なぐさみにけり」と描く感覚が決して特殊なものでなかったことを考えると、当時の読者には、女性的な男性、男性的な女性という性の交錯を扱った構想の特異さも現代程強く受け取られてはいなかったに違いない。更に、物語に即して読んでゆけば、作者は二人の男女が性をと

りかえて生きるという設定にあたり、かなり慎重かつ綿密に筆を運んでいることに気付く。よく似た顔の若君と姫君が、成長するにつれて次第により女性的な男、男性的な（ここでいう男性的は勿論平安時代物語の男主人公らしい特性を意味するのであって荒々しくたくましい男らしさではない）女になってゆく過程が述べられ、その度に父親等の深い困惑と嘆きが描かれる。物語は冒頭から父の苦悩を二人の成長と周囲の人々の誤解などと絡ませながら段階的に深まらせ、もはや尼か法師にする以外にないのではないかという思いつめた心境を通して、結局これは宿世であり、宿世の命ずるままに性をとりかえて生きる以外にはないのだという決心に持ってきている。父親の口を通してくどいまでにくり返される「かばかりの宿世なりければ……」「世に似ずつたなかりける宿世かな」「いかなりし昔の罪と思ふにも」といった嘆きは、性の転換が当事者や周囲の者の意志や力を超えた絶対的な宿世としてもたらされたものであることを語っている。事実、父親等のこの確信は、後に吉野宮によって補強され、最後には夢の告げによって立証されるわけだが、物語が発端において逃れようのない宿世を提示し、それを大前提としてその世界を描いていこうとしている点は注意する必要がある。かつて森岡常夫氏は「平安後期の物語においては源氏物語のように人物が構成上支配的役割を果たしていないのが一般の傾向である」（『平安朝物語の研究』）と述べられたが、古とりかへばやの存在を考慮に入れるとしても、現存とりかへばや物語が平安後期物語の一般的傾向を持つものであることは否定できない。寝覚物語が冒頭に主題を提示し、更に女主人公に対して

「いたくものを思ひ心を乱したまふべき宿世」を天人に予言させておいてから、物語がその予言された物思いの生涯を実現させていった如く、とりかへばや物語は性を交換するという宿世を背負って生きることを基本的な枠とし、そのことによって起こる様々な混乱、事件、苦悩、愛情を展開させた物語であるといつてよいのである。

さて、物語を以上の如く把握しておいてから従来の構造説の根拠となつている主人公の問題を考えてみたい。

3

男君と女君は、物語の語り口の定型通り父親の紹介に続いて次のように書き出される。

北の方二所ものし給ふ。一人は源宰相と聞こえしが御むすめものし給ふ。御ころざしはいとしもすぐれねど、人より先にみそめ給ひてしかば、おろかならず思ひきこえ給ふに、いとゞ世になく、玉光る男君さへ生まれ給ひしかば、またなくさがたきものに思ひきこえ給へり。今一所は藤中納言ときこえしが御むすめものし給ふが御腹にも姫君のいとうつくしげなる生まれ給ひしかば、さまざまめづらしく思ふさまにおぼしかしづく事限りなし。

この二人の北の方は「いづれもいとしもすぐれ給はぬをおぼすさまならずくちをしき事におぼしたりしかど……」「もろともにさしならびて、心ゆく北の方のおはせぬはくちをしき事なりかし」と、この時代の物語に登場する母親としてはやや異例の造型がされているが、つまるところは「十五日づつ羨みなく通ひ給ふ」と優劣ないところに落ち着かせるた

めであるらしい。以後男君と女君は

おほかたはたゞ同じものと見ゆる御かたちの、若君はあてにかほりけだかく、なまめかしき方添ひて見え給ひ、姫君ははな／＼とほこりかに見てもあくよなくあたりにこぼれちる愛敬などぞ今より似るものなくものし給ひける

といった描出を皮切りとして、幼少時、十歳前後、裳着・元服、結婚・入内等の各段階において、性格、容姿、才能などが常に比較対照され、くり返し描かれてゆくのである。例えば少し長い引用になるが十歳前後の場合をあげてみる。

△男君▽

姫君(男―筆者注)の御方に渡り給へれば、例の御帳のうちに箏の琴をしのびやかに弾きすまい給ふなり。……床におしかゝりてゐ給へば、御ぐしは丈に七八寸ばかりあまりたれば、花薄の穂に出でたる秋のけしきおぼえて裾つきのなよ／＼となびきかゝりつゝ、物語に「扇を広げたる」などこちたくいひたるほどにはあらで、これこそなつかしけれ。いにしへのかぐや姫もげにかくめでたき方はかくしも

△女君▽

西の対に渡り給ふに、横笛の声すごく吹きすましたなり。……桜山吹などこれはいろ／＼なるに萌黄の織物の狩衣、葡萄染めの織物の指貫着て、顔はいとふくらかに色あひいみじうきよらにて、まみらう／＼じういづことなくあざやかにほひ満ちて、愛敬は指貫の裾までこぼれおちたるやうなり。見まほしく目もおどろかるゝを、うち見るに、おつる涙ももの嘆かしさも忘れられて、うち笑まるゝ御

やあらざりけんと思給ふにつけては、目もくれつゝ近く寄り給ひて「こはいかでかくのみはなりはて給ふにか」と涙をひとめ浮けて御ぐしをかきやり給へば、いと恥づかしげにおぼし入りたる御けしき、汗になりて、御顔の色は紅梅の咲き出でたるやうにほひつゝ涙も落ちぬべく見ゆる御まみの、いと心ぐるしげなるに、いと我もこぼれて、つく／＼とこと／＼なくあはれに見奉り給ふ。……桜の御衣の、なよ／＼かなる六ばかりに、葡萄染めの織物の桂、あはひにぎは／＼しからぬを着なし給へる、人柄にもてはやされて、袖口裾の襷までをかしげなり。「いであさましや。尼などにて、ひとへにその方のいとなみにてや、かしづきもたらまし」と見給ふも、くちをしく涙ぞかきくらされて……

二人連れの描出法は物語においてはむしろ常套的であると言ってよい

さまを「あないみじ。これももとの女にてかしきづきたてたらんに、いかばかりめでたく、うつくしからん」と胸つぶれて見給ふ。御ぐしもこれは長さこそ劣りたれ、裾などは扇を広げたらんやうにて、丈に少しはづれたるほどにこぼれかゝれるやうだい、頭つきなど、見るとに笑まれながら、心のうちはくらざるゝや。いと高き人の子どもなどあまたあて、碁、双六打ち、はなやかに笑ひのゝしり、鞠、小弓など遊ぶもいとさまことにめづらかなり。「あないみじのわざや。さても、これはかくてあるべき事かは。今はともかくもしなすべき方のなきも、今さらせめて女にとりなすべきやうもなからり。これも法師になして、人に交らはせず、後の世をつとめさせんこそよからめ」とおぼすも、心々は又さしもあらじかし。

が、この場合、男女という異性同士であり、しかも各々が相手の性を有しているという点で、従来の二人連れとは全く異なる意味を持つものである。つまり二人は互いに鏡であり、同時に存在することによってのみ自分の位置が確認できる関係にあるのである。容貌、服装、その姿を見ての父親の嘆きまでが全く同じパターンでくり返されるといふこの全き対照法は、外側からの描写のみにとどまらない。プロットに関係する場面での心の動きも又、一対として描かれている。例えば、二人の紹介が一段落し、いよいよ社会の中で性を交換して生活してゆくことになったところで、中納言となった女君が尚侍として宣耀殿に住む男君を訪れる場面がある。その折二人は互いの姿を見つめつつ「この御ありさまをだに、例の人と見奉らばや」と心を乱すのである。又、物語が進み、窮地に立った女君が失踪を決意してそれとなく尚侍に別れを告げに立ち寄る場面では二人の心理は次のように描かれる。

藤の織物の御几帳、なでしこの御衣、青朽葉の小桂奉りて御几帳よりほのく見ゆる御有様、世になくめでたきを、「あはれ、わがもとよ、りかやうにてあるべきものを」と、今始めた事ならねど身を思ひかざるにつけても、いみじくあさましくおぼゆ。督の君は、大将のはなぐとにほひ、限りなきかたちのいとおもやせたりしも、いとどうつくしうらうたげなるに、おほやけしくもてすくよけたるほどこそをしく見えけれ、かやうに思ひしめり屈じ給へるは、なよくとあはれになつかしく見ゆるを、「世づかさりける身どもかな。われぞかくてあるべきかし」と、かたみに見交はし給ひて……(傍点筆者)

宿世に支配された互いの姿を見て心の内に「わがもとよりかやうにてあるべきものを」「われぞかくてあるべきかし」と思うのは、とりかへばやの世界が正常に戻る時期が近づいていることを思わせるが、いずれにしろ、このように二人の心理の動きも一対として描かれている点は注意しておいてよいだろう。とりかへばやの宿世は男女のいずれか一方に与えられたものではない。父の夢に告げられたように「男は女となし、女をば男のやうになし」て嘆かせるというものであった。従って男君女君は、本来相手が生きるべき道を歩いているのであった。二人は同時に對等に存在し、相呼応する二人一対の動きで物語は展開してゆくのである。宿世から解放された時には、二人は入れかわって相手の立場にそのまますっぽりとおさまることができねばならなかった。ちなみに、物語における二人の歩みをたどってみると、作者は陰に陽に実に巧みにプロットを進めていることに気づく。

△女君▽

- 男として生活、四の君と結婚
- 四の君の密通、妊娠——第一の危機
- 宰相中将と契る。懐妊——第二の危機
- 出産のため京を離れ、宇治に身を隠す。女の性に戻る
- 男君に再会
- 男君と立場を入れかえる

△男君▽

- 女として生活、尚侍として入内
- 春宮(女一の宮)と契る
- 宰相中将に忍び込まれる
- 春宮身籠る
- 女君を探すため男の姿に戻る。京を離れ吉野に滞在
- 女君に再会
- 女君にかわって世間に出る決意
- 大将として帰京

○尚侍として入内

○帝の寵愛を受ける

○中宮となる

○四の君、吉野姫君を妻とする

○関白左大臣となる。

女君の性の秘密は、四の君と宰相中将、女君と宰相中将という二つの密通事件によって暴露寸前の危機を迎える。同様に男君の方も春宮との秘密の交わり、宰相中将の強引な求愛、春宮の懐妊という事体で窮地に追い込まれていくといった具合で、そこに、平行的筋の展開を巡ることができよう。こうしたことから私は、とりかへばや物語という作品は、男女一对の主人公を中軸として、性の交錯という理不尽な宿世の中でどのように苦悩し、生きていったかを描こうとしたものではないかと思うのである。それでは今一人主人公の問題として注意されている宰相中将はどうか。この人物は男女主人公が性をとりかえて生きることになった装着、元服の記事の直後、即ち、物語がいよいよ独自の展開を始める最初に「そのころの帝の御叔父に、式部卿の宮と聞こゆる人の御ひとつこの君、この侍従の君にはふたつばかりこのかみにて」と登場する。「そのころ」という改まった書き出し、父の素姓から始まって年齢、容姿、人柄、世評までが読者の前の披露されるといった扱いは、物語の常套から言えば、主人公の相手役の書き方に匹敵する。前半の女君との関わり、終始変わらぬ尚侍への慕情、後半の男君との絡まりなどを考えると、作者は宰相中将を二人の主人公たちに対し、それと絡みあって物語を進めてゆく人物として設定したらしく思われる。桑原氏の言われるように、巻四に於ては宰相中将の苦悩が大きく描かれているが、悩みがど

れほどクローズアップされても、それらが、「まことや……」で書き出されている点に注意するならば、物語の主人公にはなり得ていないと考えるべきではなからうか。

さて、以上の如く物語の基本的設定と人物の関係を見てくると、作品の構造はおのずから明らかになってくる。私はこの作品の基本的構造を次の如く三部に考えるのが最も妥当なのではないかと考える。

第一部(巻一・二)——性の交錯により起る危機・葛藤——宿世に支配された世界

第二部(巻三)——危機の打解、混乱と努力——宿世の崩壊する過程

第三部(巻四)——打解後の安定——宿世から解放された世界

やや図式的に過ぎる嫌いもあるが、巻一で吉野宮によってなされた予言が巻四で実現していること、主要人物の出入りが一部から三部まで殆ど変化なく、第一部の人間関係が、男女主人公を入れかえた同じ形で三部に再現されること、写本のうち三冊本系が巻一と二を行変えせずに一巻として伝えていることなどは、こうした三部構成の考え方を裏付けるものではなからうか。

4

しかし、ここで一つ注意しておかなければならないことがある。というのは、今私が述べてきたのは作品の大筋を辿り主人公を明確化するこゝとによって得た結論であった。しかし、作品を一読した時の印象は、必ずしもこのように整然としたものではない。これは巻四で主人公が変わったとする見方が存在する問題にも通じる。先に私は、筋の展開からいけば四の君の密通事件及び女君の密通事件は、男君と春宮の関係に対応す

ると述べたが、実は、実際の作品の中で、より具体的に詳しく描かれるのは前者であって、後者の方はごく軽く触れられているに過ぎない。つまり、男女一対が主人公であると言っても各々の事件で二人が描かれる重さは常に平等ではない。紹介の際に見た如き、或はプロットのみを追った時に表われたような見事な対照的描出は全ての場面で取られてはいないのである。筋立ての構造と、実際に作品に描かれた世界とのギャップ——そこにこの作品の持つ大きな問題が隠れているように思われる。以下、とりかへばや物語の基本構造に沿ってそこに描かれたものを改めて検証してみたい。

巻一では、秘密を隠し持ったまま安定しようとした世界に第一の危機が襲うことになる。四の君と宰相中将の密通である。更に巻二では第二の危機、即ち女君自身が我身の秘密を見破られ宰相中将と契る運命に追い込まれる。勿論一方では男君と春宮の問題が進行しているわけだが、作者は女君の時ほど明確に男君の運命を描こうとはしない。同じような異常な宿世を負い、似たような不自然な愛の形に苦しむ男女を登場させながら、作者はこの宿世の苦しみの世界を、主として女の側から描こうとするのである。女の立場からそこに起こる事件を解釈し告発しようとしているのは注目する必要があるだろう。問題は主人公が男か女かという点ではない。同じ問題をどちらの立場から描こうとしているかという点である。その意味で、第一部は諸氏の言われるように女君に密着した場所で物語が語られていると見てよいのである。さて、第一の事件はとりかへばやの秘密が露頭するかもしれないという恐れと不安を齎す

ものとして用意された投石であった。密通とは言え、女君は四の君にあっては名目だけの夫であり、本当の意味の密通ではない。従って、すぐに更に緊迫した筋立てとしての第二の事件を用意している作者としては、ここでは、四の君や宰相中将が抱く不審や疑い、又、秘密を持つ女君の不安と焦燥を描きつつ、物語を進めてゆけばよかったわけである。しかし、実際の作品はこの段階ですでに構造の持つそうした枠から踏み出して、一步深い心の世界を描きはじめていることに気づく。

後期物語のいづれもが多かれ少かれそうであるように、とりかへばや物語もその特色の一つとして心理描写をあげてよいだろう。例えば第一の密通事件を知った女君、失踪した女君を探すため男の姿に戻る決意をする男君、男君と入れかわって入内した女尚侍から今までの事の真相を打ち明けられた春宮の長い心中思惟などは、事の経過を最初から改めて辿り総括する意味を持つもので、質・量ともに寝覚物語の描き方に類似するものといつてよい。しかし、この物語の持つ心理描写のあり方の興味ある特徴の一つは、事件を描く際、物語内でその事件が担う意味が時として忘れられ、その事件によって生ずる当事者たちの心の動きが懸命に追いかけられる点にある。一つの石が投げ込まれる、すると作者は石を投げた目的を忘れ、その描く波紋に多くの関心を奪われてしまう傾向が見られるのである。例えば、第一の事件後の四の君の心理は、
つゆにても人にけしき聞きつけられては、いかでながらふべき身ぞとおぼし入りながらも、ほのかなる行きあひのをりく、うつし心もなきまで、泣きまどひいらるゝさま、なまめかしうあはれげなるもたび

重なれば見知られ給はずもあらず。中納言のいとめでたくすぐれながら、よそ／＼にて人目ばかりなさけあるさまに、のどやかにさまよき目移しには、かういといみじく、死ぬばかり思ひいらるゝ人をこころざしあるにこそと思ひながら、けしきにても人のもり聞きたらん時と、おそろしうそら恥づかしきに、人知れぬあはれのみ知られずしもあらずなりにけるも、我ながらいと心うと思ひ知らるゝ。

と描かれる。理性とは別のところでいつしか宰相中将にひかれていってしまう自己の矛盾し葛藤する心理を自覚する四の君を、作者はあたかも主人公を描くが如きこまやかな筆で描写し分析する。四の君だけに限らない。新しい恋に揺れ動く宰相中将、事情を知った女君、不審と同情を抱く父殿の心理が、各々の場でクローズアップされるのである。中でも、女君はこの一件を通して、「さはいへど、まことならぬ契りをおぼしなるにこそは」「おほどかにあてにおはせん女は、たどなつかしうあはれなるよその語りひしもこそあはれなるべけれど、我より深くおぼしなびかるゝ方のあらむよ」といった、同性として女の性の悲しさにまで思い至るのである。次いで第二の事件が描かれるのだが、今度の場合は第一の事件とちがって女君が直接関係するだけに、その心理は更に詳しい。この事件は構成の上からは、主人公たちの秘密の顕在化、身の破滅を意味し、女君の妊娠がその状況を極限にまで追い込むわけだが、作者はこの問題も、二人の社会的な破局の面から捉えず、女の生き方の問題として描いているのである。言うまでもなくこの第二の事件は、単に男装の女が妊娠をして窮地に立ったというだけのものではない。世間的に

は夫婦として親しみ合ってきた二人の女性が宰相中将という好色者を挟んで否応なく対立しなければならぬという絶望的状况を意味していた。姉妹で一人の男に対する運命にあった寢覚物語以上に女君の立場は複雑であり、深刻である。夫としては四の君に裏切られ、女としては四の君を裏切ることになったのである。源氏物語宇治十帖の世界を色濃く継承した平安後期の物語は、どの作品をとっても何らかの形で、許されざる人間関係故の声に出して叫びえない苦悩、解放されることのない心の澱みが描かれてきたといつて過言ではない。そして、互いに交流しない心、わかりあえない言葉が浮き彫りにされ、人々に取り巻かれ愛の営みがありながらも冷え冷えとした孤独の淵に沈み込んでいく思いが描かれていた。この作品の場合、真正面から性を扱うだけに、秘密は一層固く個人の中に封じられ、口は閉ざされねばならなかった。「よその人聞き」を思えば、女君は両親や兄にさえ、「つゆもものしげなるけしきも見えむ」と振舞う以外になかったのである。そうした状況の中で女君が見たものは、男の愛のはかなさ、人の心の頼み難さであった。

○かばかりの人に身をまかせて入りぬなんわが身の契りはいとあかぬことなるべきを、まいて人の心、きはめて頼もしげなく、あまりあだめきすぎて、このましう色めき、たゞ今だにこころざし劣らぬさまに絶えずひきしのぶる心いと深し。まして今はこれはかうぞかしとおだしう常の事に見馴れて、つらき心も見えん時は、いかばかりかはものくやしう人笑はれなるべき。

○男も女も、頼もしげなきものは人の心かな。この女君(＝四の君)、

見る目ありさまは子めかしうあてやかに物遠きながら、かくこそはものし給ひけれ。うちくのわが心こそいかゞはせんに思ひなざるれ、よその人聞き、事のありさま、わがためいみじき事なりや。まして世の常ならむなべての人の心いかならむ。

こうした思ひは、卷三の前半まで続く。

先にも述べたように卷三は、性の交錯した主人公たちが、それをもとに戻すための努力と混乱を描くべく設定された巻である。巻頭の周到さ、「われぞかくてあるべきかし」「わがもとよりかやうにてあるべきものを」といった二人の感慨、京都を離れた宇治や吉野が中心舞台となるなど、この巻が第一部を大きく展開させるものであったことは明白である。女君の失踪は、当面の危機を一時的に回避し、時をおいて男女主人公が性を正常化するための布石として用意された筋立てであった。然るに、物語を語る作者の焦点はそこにあてられてはいない。作者の関心は巻二で設定し考えた問題を、女としてもう一度問い直すことに向けられてしまったようだ。身重で、行動も以前のように軽快にできなくなっていたとはいえ、巻二までの女君は、光るばかりに美しい貴公子として社会的には存在していた。従って、第一部で起きた危機に対する葛藤は、女であると同時に男として振舞い得る生活の中でのものであった。事実、女君は、失踪を決意した後も吉野を訪れて宮とよろづを語り合い、姫君と歌を交わす。又、四の君と語り、尚侍を宮中に尋ねることもできた。そんな女君が、名実共に完全な女になって生活を始める時、今までの状況は以前とちがった意味を持つてくることになるだろう。作者はそ

れを、次のように描く。

○かしらなど洗はせなどして、髪もかき垂れなどして見れば、尼のほどにふさぐとかりたり。眉抜き、かねつけなど女びさせたれば……わが心はいかにしつる身ぞとのみおぼえて、世の中のこともいぶせく、ほれぐとして、もののみかなしければ、起きもあがらぬを……

○薬のしるしにや、御ぐしもひきのぶるやうに、うつくしげにこりかりて、眉などもかりはらはせて日ごろになり行く。いとありつき女さまになりはてて、はなぐとつしく、にほひやかなる見どころ、今少しまさりて、顔いといたく思ひ乱れ屈じしめりて、ひとへにうちたのみて、身に添ひたるほどの今は、わが身かくてあるべきぞかしと思ひ知り、なよくともてなしたるは、ありし人ともおぼえず、らうたげにたをやかなるを……

こうした女君の変貌は、後期物語の持つ荒唐無稽さ、不自然さ、安易さの一面として指摘できるかもしれない。しかし私は、姿形の変化に沿って女君の精神的変貌が描かれている点に注意したい。髪を長く引き、眉を抜き、幾重にも重ねた衣装の中に埋もれて薄明の室内に生活を始めることで、女君は、改めて自分と京都に残る四の君の悲劇を思うのである。ここに至った女君の心の中には、物語が大前提として設定したとりかへばやの歎き、即ち宿世による不幸はもはや問題にされてはいない。げに、とてもかくても、世づかぬ身のゆかり、われも人も世の乱れあるべきを思へば、ただ人一人の、あまりくまなき御おこたりと思ふぞ

う、とまじきまでぞおぼゆる。さる方にも、動きなくすごしつべかりし身を

宿世のそれはそれとして四の君と自分は「動きなくすごしつべかりし」ものであったというのである。現在ある自分たちの悲劇は、とりもなおさず宰相中将の「あまりくまなき御おこたり」によるのだという女の立場からの糾弾は鋭い。寢覚物語の女君は、「旅寝の夢を思ひあはするまではひとりあらむとおぼさざりける浅さにさまざまなりける乱れとこそおぼゆれ」（日本古典文学全集587頁）と、男君の軽々しい愛の行為を非難した。歩いてきた道こそちがえ、同様の思いにとりかへばやの女君も行き着いているのである。考えてみれば、この問題は蜻蛉日記以来、平安女流文学の底を流れ続けてきたものであった。しかし、それならばなぜ作者はあえて古とりかへばやの設定を用いて物語を創作したのか。蜻蛉日記的世界を描くことが目的であったなら、あえて性を交錯させるまでもなかった筈である。思うに、構造のあり方、寢覚物語の系統に立つ心理描写の様子からみて、作者は、性をとりかえて生きるという特異な宿世を背負った主人公たちの運命を、古とりかへばやの作者が見過ごしてきた心理的な面に重きをおいて描いてみようと思図したのではなかったか。しかしながら、筋立てに沿って場面を描いてゆく過程で、作者は次第に一夫多妻によってもたらされる女の苦悩に引きずられ、日常的現実的な方向にあともどりし、結果的に女性の悲劇を描くことになったのである。

しかし、とりかへばや物語の作者は、追ってきた心理をその後の筋の

展開に生かすことができなかった。構成のバランスをくずしながら深入りし描かれた心理は、その場その場で物語の中に放置され、作品全体を貫く思想にはなり得なかった。物語は一つの事件、一つの場面の中の心理を描き終ると、再び筋立ての方向にむかって軌道修正される。巻三の途中からにわかには物語の表面に動き始める男君の登場はそれを語るものである。男尚侍は長い心中思惟の後「我もとのありさまになりて、この人を心の及ばん限り尋ね侍らんとなん思ひ侍る」と決心する。ここにみられる長い心中思惟といい決断といい、女君側のきめ細かな描写に比べて唐突の感を免れない。それまでの日常的な心理の世界と筋立ての方向が有機的に絡まりあって物語が構成されていない結果である。絡まりあわないだけではない。描かれてきた世界と筋立てとの間に違和感を感じさせるものが生じてしまっているといってもよい。物語はこの後、男女主人公の出会い、男君と吉野宮一家との関わりなど興味ある場面を早いテンポで語り、その筋立てを合理化するかのようになり、夢の告げが描かれる。即ち父殿の夢に僧が現れて、これまでのことは天狗のなせる業であったことを語り、今その劫が尽き、「男は男に、女は女にみななりて、思ひのごとさかえ」と告げ、この夢の告げを境として物語は二人の主人公の立場を入れかえ、本来の安定した状態に戻ってゆく過程を描いてゆくのである。超自然の現象を取り入れることにより、とりかへばやの宿世は急転直下、作品の中で解決されてしまうわけだが、構想のものものしきにも拘らず、夢の告げが第二部で果たす役割は極めて軽いものでしかない。第一部のとりかへばやの歎きに呼応し、本来重要な意味

をもっていた筈の設定が、物語の流れの中で、不要かつ異質なものになってしまっているのである。これは設定のおもしろさに頼って構想されたとりかへばや物語が、その設定の特異さを除外する方向に歩いてきてしまったということではなからうか。

第三部巻四は、男君女君を中心に、秘密を打ちあけられる春宮や四の君、また女君を失って混乱する宰相中将などに、場面毎に心理を分析しながら多くの筆を割きつつ、一方では予言を実現すべく帝と女君の交渉が描かれて、次のように終息する。

年月も過ぎ変りて、大殿御ぐしおろし給ひ、右の大臣、太政大臣になり給ひなどして、大將殿左大臣になり給ひて関白し給ふ。宮の大納言内大臣にて大將かけ給ふ。若君たちも元服し給ひて、中将少將と皆聞ゆめり。帝も降りあさせ給ひぬれば、春宮位につかせ給ふ。二の宮坊にゐさせ給ふ。今の関白殿の四の君腹の大姫君、女御に参り給ひて：
 …様々思ふ様にめでたく御心ゆく中にも、内の大臣は年月過ぎ変り、世の中改まるにつけても、思ひあはする方だになくてやみにし宇治の川浪は袖にかゝらぬ時のまなく、三位の中将のおよづけ給ふまゝに、人よりことなる御様、かたち、才の程などを見給ふにつけては、「いかばかりの心にて、これをかく見ず知らず跡を絶ちてやみなんと思ひ離れけん」と思ふに、うくもつらくも恋しくもひとかたならずかなしとや

主人公たちの幸福な結末は第一部から保証されていた。しかしここに描かれる栄花とは裏腹に、巻四に生きているのは飽かぬ思いを抱いた人々

ばかりである。二人の北の方のどちらにも満足がいかなかった父と同様、男君もどの妻にも永遠の理想性を見出すことはできなかった。女君も、帝の寵を専らにしながら、作者が描くのは、わが子を自分のものと言えない深い悲しみの姿である。巻四の最終に、予言の制約を受けていない内大臣(かつて宰相中将)の歎きが書き添えられているのは、物語を書き進めてきた作者の、めでたき幸福に対する白々しい思いがひそかに託されたためではなかつたらうか。それは衰退してゆく時代の中にあって、人々が物語の中に理想性を見失っていったことと同義かもしれない。とりかへばや物語の中で最も理想的人物である筈の主人公でさえ、四の君から見れば、「人知れず上なき位にも及ぶべき身とおぼしつるに、こよなくあさはかなる心地するを、けしきにこそ出だし給はねど、かくやはものをと、心の内にはうち嘆かれながらも」と叙されていた。院政末期を生きる作者や読者にとって、虚構であるとはいえ、光源氏の再来は空々しいものであったに違いない。

とりかへばや物語は、性の交錯という興味ある問題をとりあげて創作された。しかし、大きな筋立てでかろうじて全体の構成を保っているだけで、性の交錯という問題に真正面から対決し、そこから生まれる特異な心理を発見したり、新しい主張や造型を産み出すことはできなかった。どのように設定を工夫し、新奇を求めても、描かれたものは日常的現実的な心様だったのである。日記的世界であったといつてよいかもしれない。そしてそれは、物語の作り手の問題と無関係ではないだろう。今、作者について十分に触れるゆとりを持たないが、私は、描かれた作

品の中に、男性よりも、より多く女性作者の姿を想像する。

ところで、物語がこのように虚構の意味を忘れて女流日記の世界にのめりこんでいったということは、物語の衰退の歴史を考える時、改めてとりあげてみなければならない問題であろう。中村真一郎氏がかつて現存とりかへばやが改作であることをあげて、「しかし、今ぼくらが読むとりかへばやも随分ひどい物語である。ほとんど変態性欲者の書いたポルノグラフィではないかと思われるほど、女性の性の生理的事実などに偏執的興味を示している。……かえって中途半端に良俗を刺激しないように改作されたものより、院政時代のデカダンスの最中に生れた淫蕩醜怪で無制限な夢想と悲観主義との混合物である原作そのものを読んだ方がどれだけ興味深いか知れないではないか」（『王朝の文学』）と述べられたことがある。現存作品に対する批評は正鵠を得ているとは思われないが、新奇な設定にふさわしい新しい心理や異常な世界が発見されていたなら、あるいは物語は又別の道を開拓することができたのかもしれない。なかつた。

引用文は鈴木弘道著「とりかへばや物語の研究」校注編本文を使わせていただいたが私に解した箇所もある。